亀塚（かめづか）遺跡（本発掘調査B）

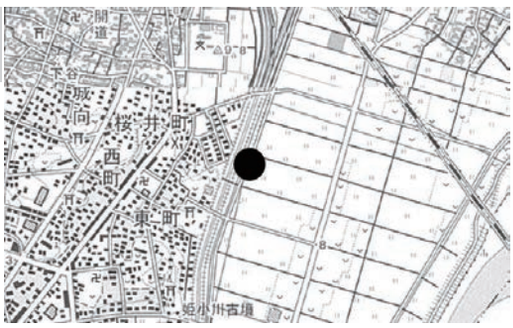
所在地　安城市桜井町・東町地内
（北緯34度55分05秒 東経137度05分53秒）

調査理由　中小河川改良事業（鹿乗川）

調査期間　令和2年6月～令和2年8月

調査面積　567㎡

担当者　池本正明・永井邦仁



調査地点（1/2.5万「安城」）

調査の経過　調査は、愛知県建設局河川課から愛知県県民文化局を通じた委託事業として行なった。亀塚遺跡は、昭和48年度と同52年度、平成10年度に安城市教育委員会による発掘調査が行われている。昭和52年の第2次調査では人面文壺形土器が出土しており、国指定重要文化財となっている。当センターでは、平成10年度より鹿乗川流域での発掘調査を行っており、この時は、今年度の発掘調査区（20A区）の東方で鉄塔移設に伴う小規模な調査が行われている（10A区）。その後、平成28年度からは鹿乗川の河川改良工事に伴う発掘調査が亀塚遺跡でも始まり（16A区）、令和元年度の調査区（19区）では、古墳時代前期までに湿地化した旧河道003NRが検出され、多量の土器や赤彩された盾を含む木製品が出土している。昨年度と同様に事業用地内で先行する導水管工事に関わる範囲を対象として、幅4mのトレンチ状の調査区となった。北から20A・B区、19区を挟んで20C区である。

立地と環境　遺跡は、安城市東部の沖積地に所在する。碧海台地東縁の段丘崖下を南下する鹿乗川に沿って、多数の遺跡が連続して分布しており、鹿乗川流域遺跡群の特徴となっている。また、その大半は弥生～古墳時代に最盛期となる集落遺跡である。これらの立地する微高地は、弥生時代まで水流のあった幅約30mの旧河道に伴う自然堤防である。先述のように、旧河道は古墳時代前期までに大半が埋没しており、それと集落の衰退とが連動しているようにみえる。亀塚遺跡では、埋文センターの19区と安城市教育委員会の第1次調査区で北西～南東方向の旧河道が確認されており、そこから北東側が微高地であると考えられ、20A・B区はそこに該当する。微高地の基盤層は、最上層が明黄褐色系の砂質シルトで下層は河川堆積の細粒砂層となっている。なお亀塚遺跡周辺では、北側に中狭間遺跡をはじめとする遺跡群があり、対して南側には向田遺跡がある。向田遺跡西側の台地上には古墳時代前期の獅子塚古墳が立地する。

調査の概要

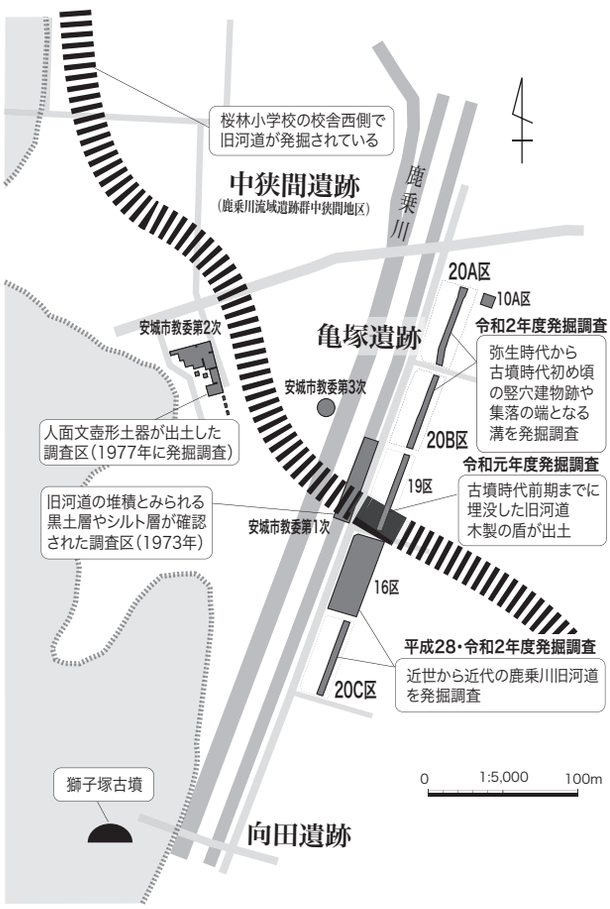
２０Ａ区　20A区は、その中～南部が微高地の頂部に相当し、南側の20B区北部まで続いている。この間、遺構面（基盤層）は地表面（耕作面）から約0.2m下ときわめて浅く、鹿乗川流域で広範にみられる黒褐色シルト遺物包含層が削平されている状況からすると、微高地の頂部はさらに高く、すでに削平された遺構・遺物も想定される。主な遺構の時期は、弥生時代中期後葉から平安時代までであるが、中世～近代の溝（22SD・23SDなど）もある。

A区北部では、最古段階の遺構である溝168SDの底からは古井式（弥生時代中期後葉）の斜格子文壺が出土している。168SDは幅2.8mで断面が逆台形をしており、北西～南東方向に延びているが、これは旧河道003NRの方向に平行である。168SDの南側にはこれと直交する溝31SDがあり、その南端は屈曲している。この形状から周溝墓（もしくは墳丘墓）の可能性が考えられる。さらに31SDは溝18SDに切られており、その交差付近からは弥生

土器が多量に出土している。所属遺構については検討が必要である。また調査区南端には溝55SDがありこれも屈曲部を伴っており、周溝墓の可能性がある。

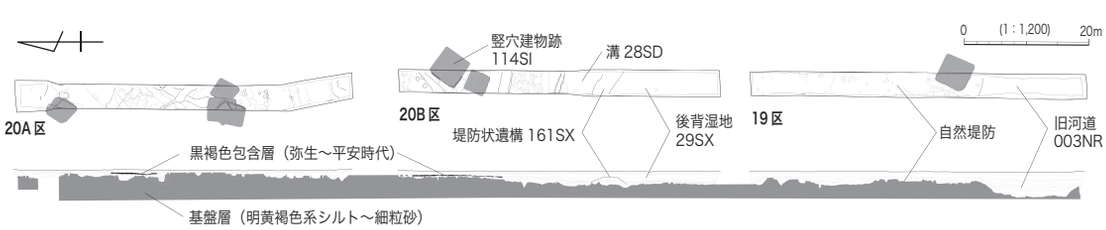
A区北部には隅丸方形の土坑07SKがある。垂直な掘方の形状がよく残っている。複数の炭化物層があり、同層からは弥生土器が出土している。弥生土器は凹線文系が含まれる。07SKと同形状の土坑は、これに切られる土坑08SKなどその周辺に集中している。

竪穴建物跡は09SIや158SIで幅約0.1mの壁溝を検出しているが、検出面から床面まで数cmしか残存していないものもあり、結果的に遺物の出土もほとんどないので時期の特定はできなかった。ただし16SI・158SI・159SIは遺構の切り合いから周溝墓31SD（先述）より後となることから、弥生時代後期～終末期と考えられる。竪穴建物跡群の南側では深さ20cm以上のピットが約10基検出された（44SPなど）。これらは、一部（60SPなど）では断面で柱痕がみえるので、掘立柱建物跡を構成するとみられる。



遺跡の概要

20A・B 区全景（南から）



亀塚遺跡（20A 区～19 区）の基本土層断面（1:1,200、ただし垂直方向は 2 倍に拡大）

遺跡の概要と基本土層

調査区北端の溝02・03SDは、幅約2mで断面が皿状を呈しており、それぞれ8世紀半ばの須恵器と9世紀後半の灰釉陶器が出土している。須恵器杯の底部外面には1文字の墨書がある（未判読）。なお、亀塚遺跡全体でみると古代の遺構や遺物は少ない。

２０Ｂ区　20B区は、A区から続く微高地頂部が南部へ向かって下り傾斜となっている。B区南部は、黒褐色シルトが水平に堆積する不明遺構29SXであるが、人為的な掘り込みがみられないことから19区の旧河道003NRに伴う後背湿地の可能性がある。その北端には、一部が盛土で構築されたとみられる堤防状遺構161SXがある。少なくとも161SXの上半部は29SX堆積層を覆っており、特に表層部分で山中式期新段階～欠山式期の弥生土器を多量に含んでいる。土器は、161SX北側斜面すなわち大溝28SDに沿って集中する傾向にある。

大溝28SDは、幅約7m、深さ約0.6mの皿状で、幅に対して平らで浅い底面となっており、埋土は暗褐色系のシルトであるが堤防状遺構161SXほどの土器集中はない。28SDは、基盤層の砂層まで掘り抜かれていないことや、南側の不明遺構029SXとの間に161SXがあることから、水を避けた道路だった可能性もある。また、28SDの下位で同一方向の溝194SDが検出されており、28SD以前は溝195SDとともに集落南限を区画していた可能性がある。その195SDは断面が薬研堀形で、環濠を思わせる。埋土の半ばに土器片が集中し、山中式期とみられる。注意すべきは、その検出面が28SDより1層下であることで、埋没した195SDなどが削平されてから28SDへ至る変遷が想定される。

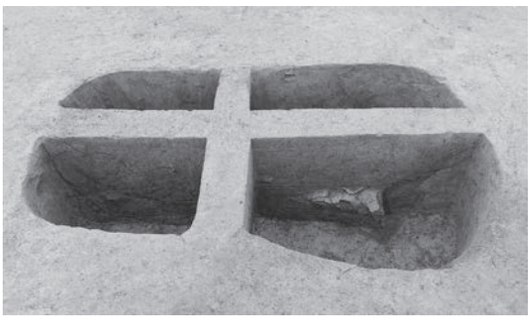
竪穴建物跡は3基検出した。114SIは切り合い関係で最上位にあり、検出時にほぼ床面の状態であったが、その全面に炭化物が散布しているのが特徴である。遺物は寡少ながら欠山式期と考えられる。114SI・118SIから南側では建物遺構が希薄となり、緩い下り傾斜となっている。また195SDのすぐ北側では、1層下の検出面で焼土・炭化物の多い竪穴建物跡205SIを検出した。

上記以外には、溝（84SD・100SD）やピット（81SP～83SP、111SP）などを検出した。前者は遺構の切り合い関係で一番新しい時期に位置付けられる。84SDは旧河道003NRと直交する方位で、100SDはこれらとは関係なくほぼ東西方向に延びている。遺物は弥生土器・土師器に限られる。一方、B区北部のピット群は20A区で検出されたものと同様の規模であり、掘立柱建物跡を構成すると考えられる。

２０Ｃ区　20C区では、調査区全体で地表面下約2mまで粘土から粗粒砂で構成される互層となっており、他の調査区でみられるシルト主体の基盤層はほとんどなかった。また、層中からは打ち込まれた木杭や近世後半以降の常滑産甕が出土している。このことから近世～近代の鹿乗川旧河道と考えられる。北側の16区でも南西部を中心に同様の層が確認されており、検出されたのは旧河道が北西から南東方向へカーブする箇所であると考えられる。

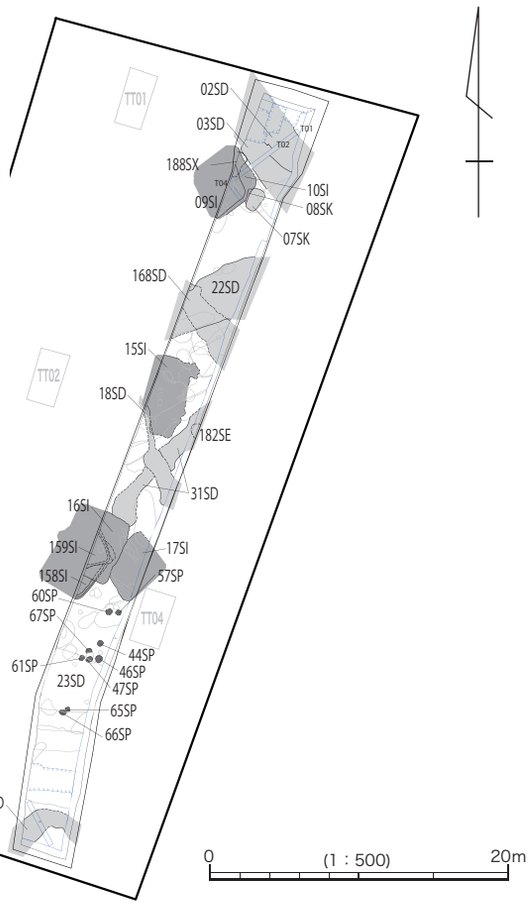
ま と め　以上のように亀塚遺跡20A・B区では、弥生時代中期～終末期に営まれた集落の一端を確認した。竪穴建物や掘立柱建物で構成される居住域の南縁は、溝や堤防状施設で区画され、旧河道に沿って西縁へ続いていたとみられる。このことから検出された集落は、1977年に人面文壺形土器が出土した地点とは旧河道を挟んだ別の区域である可能性が高くなった。また、微高地頂部が20A・B区から東方へ広がっている可能性が高く、集落域の形状も寄島遺跡のような南北長い楕円形ではなく、東西にも展開するより正円形に近いものと推測される。

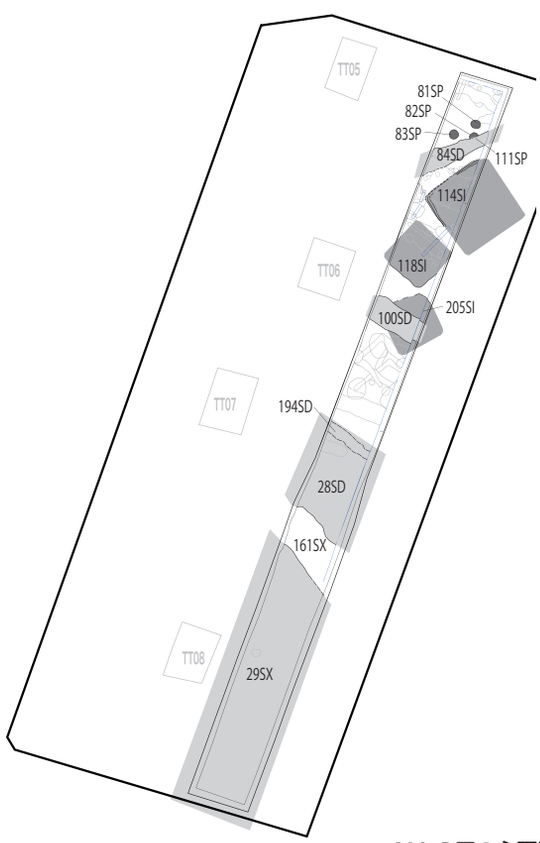
（永井邦仁）

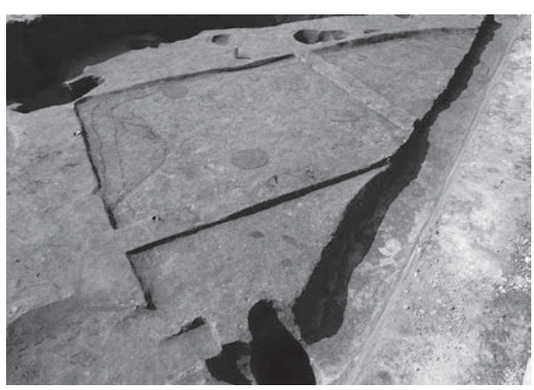


土坑07SK土層断面（東から）

溝168SD弥生土器出土状況（西から）







竪穴建物跡114SI床面遺構検出状況（南東から）

堤防状遺構161SX遺物出土状況（北東から）

20A・B区の主要遺構分布